

コピーライターが翻訳する、
名作古典現代語訳シリーズ
企画意図

平成17年5月11日
能文社 水野 聡

P.3	企画趣旨
P.4	企画目的
P.5	現状
P.6	課題
P.7	問題解決
P.8	シリーズ作品
P.9	シリーズ作品 1.
P.10	シリーズ作品 2.
P.11	シリーズ作品 3.
P.12	訳者プロフィール

海外では多く翻訳・出版され、親しまれている、日本の古典について、私のまわりにいる日本人が、あまりに読んでいない、知らないことに失望し、ひとりでも多くの現代日本人にわが国の宝、古典作品に親しんでもらいたい、と心から願っている。

ついでには、全く新しいアプローチによる古典現代語訳作品出版を目指し、以下企画意図をご提案させていただく。

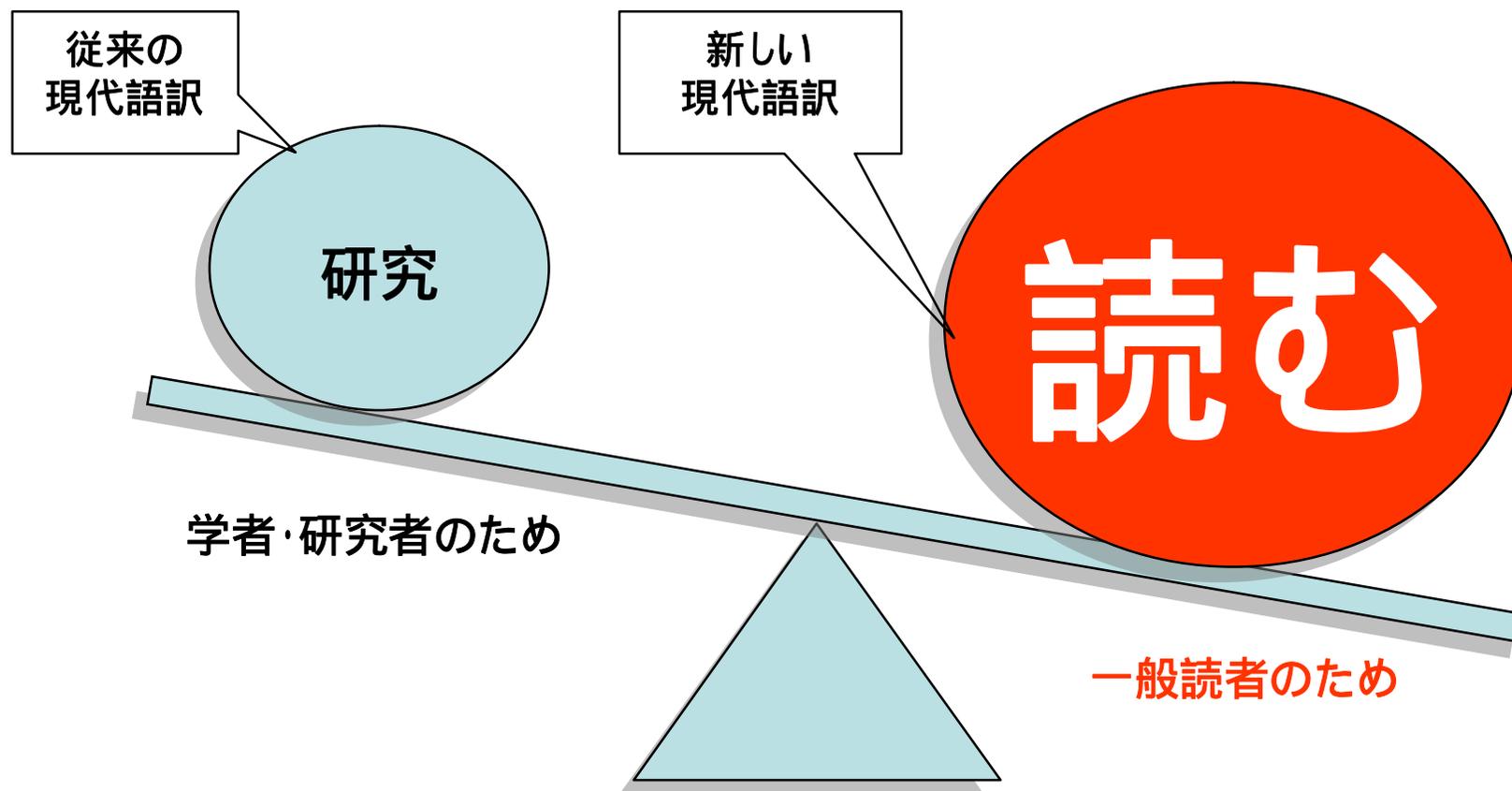
作品は「葉隠」「五輪書」「風姿花伝」。

現在すべて完訳、翻訳済み。コピーライターが翻訳する、すべての日本人に読んでもらえる、ベストな古典の平成版、超やさしい、面白い現代語訳である。

小説を読むように、わくわくスラスラ古典の名作が読めることと思う。

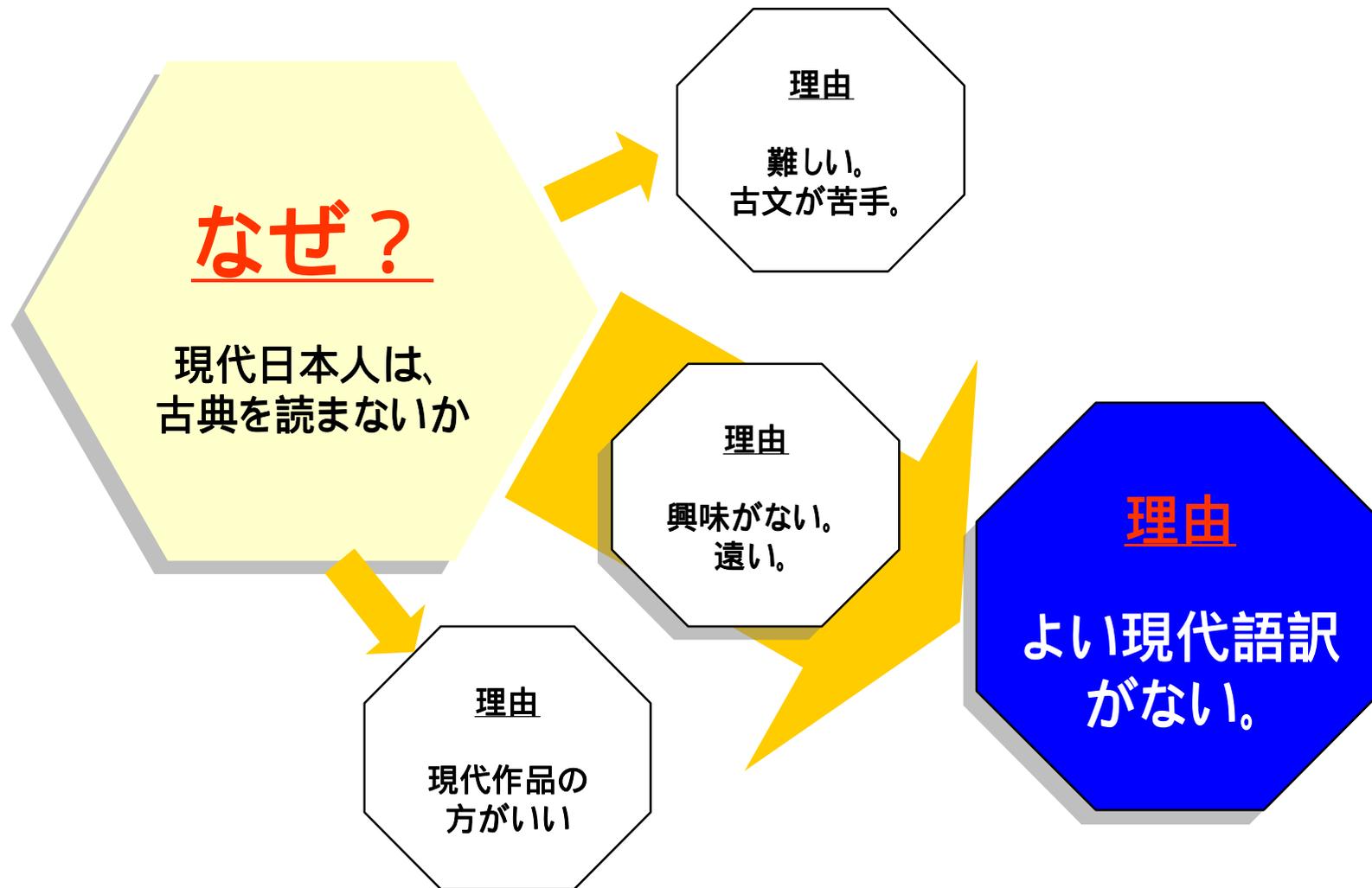
企画目的

従来の学習や研究のための現代語訳ではなく、古典に親しみ「読む」ための、明解な現代語訳を提案する。



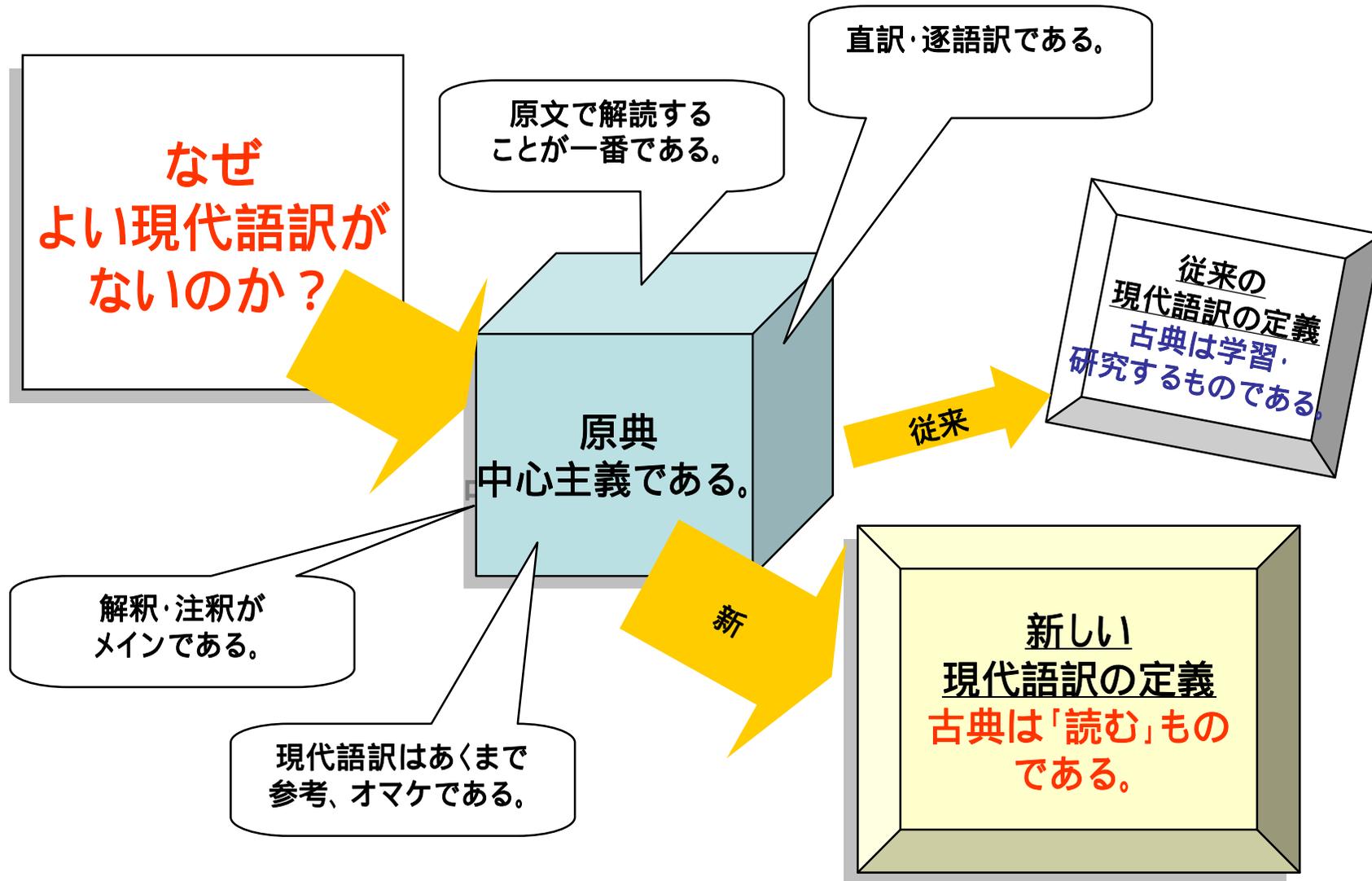
現状

なぜ、現代日本人は古典を読まなくなったのか？それは従来「よい」とされる、古典現代語訳の位置づけの問題である。



課題

なぜ、よい現代語訳がないのか？いい現代語訳の定義とは何か？



古典を平成リアルタイムの現代語でよみがえらせる。新しい古文翻訳のアプローチとコピーライターの文章技術で「読ませる」現代語訳を作成する。

コピー文章技術

コピーライターのついつい「読ませる」、子供にも「わからせる」文章技術を駆使。キャッチコピーの「つかみ」の技法で、直感的に、ダイレクトに伝達。文章のテンポ、流れ、歯切れのよさを重視。作品の意図・本質を最重要視。訳者の主観・解釈の排除。古典にふさわしい端正で品格のある文章。

敬語の省略

敬語の頻出・常用が、現代日本人の古典読解への最大の障壁である。文脈にもよるが、極端な場合天皇以外、全ての登場人物への敬語、丁寧語をカットした。しかし、文章・会話文中うやまう調子、丁寧なトーンを適宜活かし、原文のニュアンスを汲んだ。

注釈なし

小説を読むように、本文を読むだけで、すべての意味が理解できるように文章を構成。手元に何冊も注釈本・参考書をおく必要がない。また段落末、章末、巻末の註へと読むごとに往復しなくてもよい。最低限必要と思われる注釈は()で文末に入れた。または、原意を損なわない範囲で本文に同化させた。

「読ませる」
新現代語訳

シリーズ作品

文学は原語に作品生命が宿るため、本シリーズではジャンルとして伝書・思想書から、以下の作品を取り上げた。

シリーズ第一回
世阿弥「風姿花伝」

シリーズ第二回
宮本武蔵「五輪書」

シリーズ第三回
山本常朝、田代陣基
「葉隠」

シリーズ第四回
南坊宗啓「南方録」

平成17年現在。翻訳中

シリーズ第一回 世阿弥「風姿花伝」

原稿分量
A4、本文2段組、26ページ、37,110文字

目次
訳者より
序
第一
第二
第三
第四
第五
第六
第七

既刊 2005年1月
PHPエディターズグループ
「現代語訳 風姿花伝」



作品概要

能の大成者、世阿弥が著述した室町時代の演劇論である。内容は、能の秘伝を継承する伝書だが、あらゆる創作・表現芸術に応用できるアイデアに満ちており、アーティスト自身による、これほど体系的かつ完成された芸術論は、古今東西類を見ないだろう。七歳から年代順に具体的稽古要領を編んだ「年来稽古」、物真似の本質を把握し表現する「物学條々」、Q&A形式の「問答條々」。章立て・語り口はあくまで明快、シンプルだ。文化論としてだけではなく、すぐれたプレゼンテーションの実用書として海外でも高く評価され、多くの人に愛読されている。大陸伝来の文化から袂を分かち、日本人自ら育て、咲かせた最初の美しい「花」。風姿花伝は、700年を経た今日にも大輪の花を伝える普遍的名著である。

シリーズ第二回 宮本武蔵「五輪書」

原稿分量

A4、本文2段組、22ページ、35,652文字

目次

訳者より
地之巻
水之巻
火之巻
風之巻
空之巻

既刊 2004年8月
PHPエディターズグループ
「強く生きる極意 五輪書」



作品概要

剣聖、宮本武蔵の代表的著作。生涯、六十数度に及ぶ真剣勝負に一度として敗れず。その不敗の哲学を後世に伝える本書は、いかにして場を支配し、敵を支配し、己を支配するかを説く兵法の実践の書である。強さ、弱さ、ためらい、含みなど人間心理を隅まで見透かし、100%の確率で勝利を得ることをめざす。ゆえに、欧米の企業経営者に不敗のルールブックとして広く支持・愛読されているという。武蔵のことは粗野に感じるほど飾りがなく、徹頭徹尾論理的でクールだ。それは、勝つことの目的、生きることの意義とは何かを、時代を越えてわれわれに直接問いかけてくる。不朽の名著である。

シリーズ第三回 山本常朝、田代陣基 「葉隠」

原稿分量

A4、本文2段組、上巻67ページ、129,340文字、
中巻62ページ、113,344文字、
下巻75ページ、148,385文字

目次

上巻

訳者より

龍造寺・鍋島系図

夜陰の閑談

聞書第一

聞書第二

聞書第三

聞書第四

中巻

聞書第五

聞書第六

聞書第七

下巻

聞書第八

聞書第九

聞書第十

聞書第十一

作品概要

日本では「恥」という言葉は、死語となってしまった。欧米の「プライド」もしくり。葉隠を、読むとそれが何であったかがわかる。本書は、佐賀鍋島武士の日常・逸話を、山本常朝が口述、田代陣基が筆録した、異形の言行録である。世間では、「武士道といふは死ぬことと見つけたり」という巻頭の句で有名な、江戸元禄期武士道のバイブルとされている。が、それだけではない。全十一巻、千三百数十という膨大な話には、藩主・家老など支配階層から、足軽・槍持ち等下級武士、商人、町人、女、僧、スパイ、泥棒に至るまで、実に様々な人間の話がコレクションされているのだ。これらの話の横軸が人種・階層であるとすれば、縦軸は冒頭に述べた「恥」や「恩」といった概念でできている。縦軸がなくなれば人間ではあっても、もはや日本人ではない。何人といえるのだろうか。さてまた、本書で頻繁に出てくる「奉公」「浪人」「切腹」を、そのまま「会社勤め」「リストラ」「解雇」と読み替えてみれば、平成日本の今、そのままの姿となる。戦のない時代の武士、仕事のない時代のサラリーマンが、いかに「恥」を失わず人生をまっとうできるか。答えは、本書のいたるところで、あなたが発見するはずだ。

水野 聡 (みずの さとし)

1959年 神戸市生まれ。
関西学院大学 文学部 日本文学科 中退。

(株)リクルート、エイボン・プロダクツ(株)、日本ゲートウェイ(株)
他にて宣伝部コピーライター、広告制作プロデューサーとして勤務。
2004年独立、能文社を設立。コピーライター、古典翻訳家、マーケティングプロデューサー。

著書に「強く生きる極意 五輪書 宮本武蔵著 水野聡訳 PHPエディターズグループ 2004年8月」「現代語訳 風姿花伝 世阿弥著 水野聡訳 PHPエディターズグループ 2005年1月」がある。

趣味は、能楽観世流、居合道無外流。